宮崎市立小中学校の小規模化に対応した
「魅力ある学校づくり」の考え方

令和２年（2020 年）７月
宮崎市教育委員会

1　策定の背景と目的

（1）背景

①　人口減少と学校規模

日本の人口は、2008 年（平成２０年）をピークに減少に転じており、国立社会保障・人口問題研究所の「日本の将来推計人口（平成２９年推計）」によると、2053 年（令和３５年）には、人口が１億人を割り込み、約 9,900 万人（出生中位・死亡中位の場合の推計値）になると予測されています。

また、年少人口（０～１４歳）も、1980 年代初めの 2,700 万人規模から減少を続けており、同推計では、2056 年（令和３８年）には 1,000 万人を割り込むと予測しています。

このように、少子化に伴う日本の人口は今後も減少すると予想されますが、とりわけ年少人口の減少問題は、教育現場への影響として、「学校の小規模化」を引き起こすことが考えられます。

文部科学省では、学校の小規模化に伴う諸課題への対応について、地域の実情に応じた各自治体の主体的な取組を総合的に支援する一環として、平成２７年１月、「公立小・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」を策定しています。

同手引において、学校は、「単に教科書等の知識や技能を習得させるだけでなく、児童生徒が集団の中で、多様な考え方に触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて思考力や表現力、判断力、問題解決能力などを育み、社会性や規範意識を身に付けさせることが重要」としたうえで、そうした教育を行うためには、「一定の規模の児童生徒集団が確保されていることや、経験年数、専門性、男女比等についてバランスのとれた教職員集団が配置されていることが望ましい」、「このようなことから、一定の学校規模を確保することが重要」と、一定の考え方を示しています。

一方で、同手引においては、学校を地域コミュニティの存続や発展の中核的な施設と位置づけ、地域を挙げてその充実を図ることを希望する場合など、学校が小規模化しても存続させることが必要なケースもあることを示したうえで、その場合には、教育の充実を図ることが重要であるとしています。

本市においても、後ほど「２ 本市の現状」でも示すように、昭和６１年をピークに児童生徒数の減少が進んでおり、今後も人口減少、特に年少人口が減少傾向にあることから、市内における学校の今後のあり方について検討が必要になってきています。

②　学校の統廃合に対する本市の考え方

本市においては、学校は、児童生徒の教育のための施設であるだけでなく、指定避難所などの地域防災の拠点であったり、生涯学習や社会スポーツ、地域行事などの地域住民の交流の場であったりするなど、「地域コミュニティの核」としての性格も有しています。そのため、学校の統廃合は、地域コミュニティなどへの影響が非常に大きいといえ

ます。

このようなことから、本市では、学校の統廃合の基準は設けず、学校が小規模化したとしても、行政が主導して学校の統廃合を行うべきではなく、仮に統廃合を行う場合は、保護者や地域の方々の総意があったうえで進めることが大切であると考えています。

（２）策定の目的

前述のような背景も踏まえ、本市では、学校の小規模化にしっかりと向き合い、学校の小規模化が教育活動や学校運営に及ぼす影響、そのことによる課題などを整理するとともに、課題への対応や魅力を高めるための方策などを整理することとしました。

また、今後、児童生徒数が減少する中で、学校や地域において学校の小規模化についての議論がなされることも想定されるところであり、児童生徒数の推移や小規模化の影響など、議論の材料となる情報を備えておくことも必要と考えます。現在、本市では、全小中学校においてコミュニティ・スクールの導入を推進していますが、将来、このコミュニティ・スクール（学校運営協議会）においても、これからの学校のあり方が議論されることも考えられます。

以上のことから、小規模化が進んでも、魅力ある学校として存続させていくことを目指して、『宮崎市立小中学校の小規模化に対応した「魅力ある学校づくり」の考え方』（以下「本考え方」という。）を策定することとします。

2　本市の現状

（1）本市の児童生徒数と学校数の推移

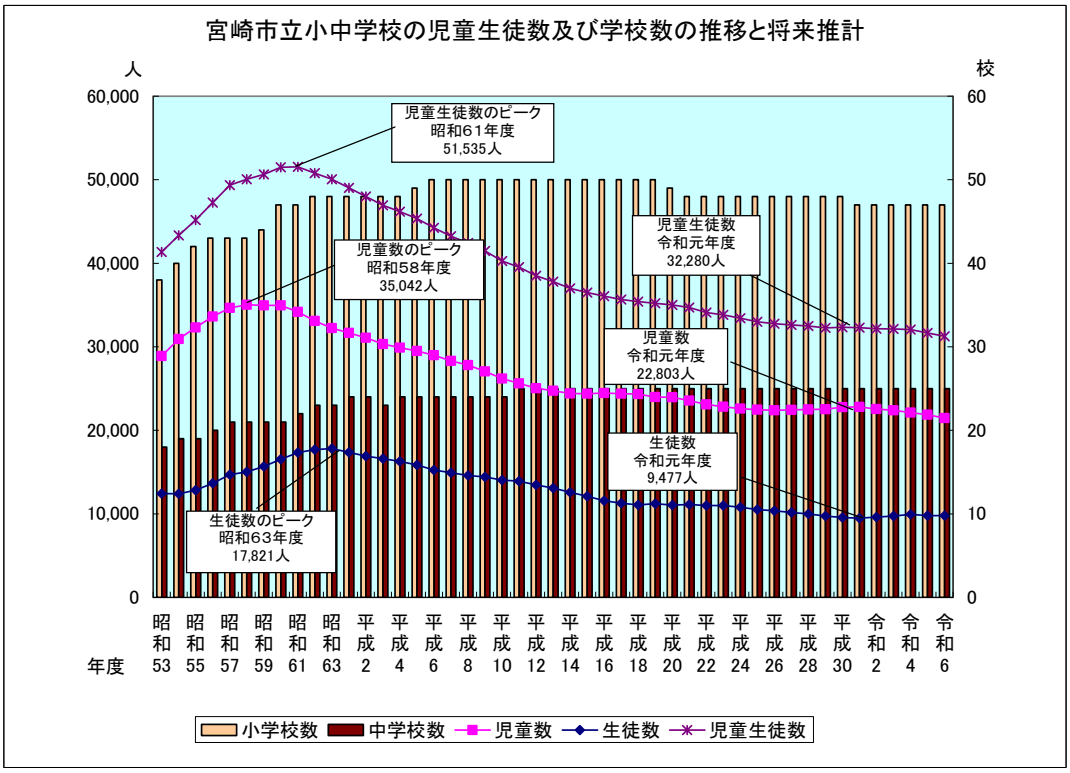
本市の児童生徒数は、ピークであった昭和６１年度に約５１，５００人でしたが、令和元年度は約３２，２００人まで減少しています。（表１・２）

最近の５年間の状況を見ますと、児童生徒数全体では３２，０００人台を維持しているものの、傾向としては、少しずつ「減少」していることがわかります。小学校と中学校のそれぞれでは、小学校の児童数は２２，０００人台を維持しつつ、若干の「増加」傾向にあるのに対し、中学校の生徒数は「減少」傾向にあり、平成２９年度には１万人を下回りました。

また、表１・２には、令和２年度から令和６年度までの児童生徒数の推計値（令和元年５月時点の市内の未就学児の数をもとに、令和元年６月に算出）も掲載しています。この推計では、児童生徒数全体は引き続き少しずつ「減少」し、令和５年度には３２，０００人を下回るとしています。小学校と中学校のそれぞれを見ますと、小学校の児童数は令和２年度から「減少」に転じ、令和５年度には２２，０００人を下回ると推計しています。一方、中学校の生徒数は令和２年度から「増加」に転じ、令和４年度まで増加するものの、令和５年度には再び「減少」に転じると推計しています。

なお、小中学校の学校数については、これまでの２０年間で、平成２０年４月に鹿村野小学校、平成２１年４月に去川小学校、平成３１年４月に浦之名小学校が閉校しましたが、小中学校ともに、学校数はほぼ横ばいとなっています。（表３）

【表１】



【表２】児童生徒数の推移と今後の将来推計（各年５月１日時点）　　単位：人

	S53	S54	S55	S56	S57	S58	S59
児童数	28, 904	30, 925	32, 316	33, 623	34, 654	35, 042	34, 958
生徒数	12, 437	12, 409	12, 848	13, 654	14, 688	15, 024	15, 678
児童生徒数	41, 341	43, 334	45, 164	47, 277	49, 342	50, 066	50, 636

ピーク

	S60	S61	S62	S63	H1	H2	H3
児童数	34, 962	34, 189	33, 102	32, 233	31, 660	31, 085	30, 336
生徒数	16, 529	17, 346	17, 689	17, 821	17, 366	16, 901	16, 612
児童生徒数	51, 491	51, 535	50, 791	50, 054	49, 026	47, 986	46, 948

ピーク　ピーク

	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10
児童数	29, 892	29, 506	28, 993	28, 319	27, 819	27, 055	26, 211
生徒数	16, 294	15, 850	15, 254	14, 915	14, 603	14, 422	14, 048
児童生徒数	46, 186	45, 356	44, 247	43, 234	42, 422	41, 477	40, 259

	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17
児童数	25, 624	25, 032	24, 732	24, 422	24, 394	24, 470	24, 390
生徒数	13, 921	13, 464	13, 076	12, 581	12, 109	11, 584	11, 275
児童生徒数	39, 545	38, 496	37, 808	37, 003	36, 503	36, 054	35, 665

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
児童数	24, 325	23, 980	23, 965	23, 569	23, 101	22, 830	22, 613
生徒数	11, 083	11, 219	11, 047	11, 127	11, 003	10, 989	10, 806
児童生徒数	35, 408	35, 199	35, 012	34, 696	34, 104	33, 819	33, 419

	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1
児童数	22, 482	22, 407	22, 456	22, 502	22, 531	22, 777	22, 803
生徒数	10, 515	10, 358	10, 164	10, 002	9, 731	9, 574	9, 477
児童生徒数	32, 997	32, 765	32, 620	32, 504	32, 262	32, 351	32, 280

	R2	R3	R4	R5	R6
児童数	22, 548	22, 407	22, 122	21, 876	21, 469
生徒数	9, 619	9, 740	9, 937	9, 795	9, 791
児童生徒数	32, 167	32, 147	32, 059	31, 671	31, 260

R2 から R6は推計値

【表３】学校数の推移（各年４月１日時点）　　単位：校

年度	S53	S54	S55	S56	S57	S59	S60	S61	S62	H元	H3	H4	H5	H6	H11	H20	H21	H31
小学校	38	40	42	43	→	44	47	→	48	→	→	→	49	50	→	49	48	47
		本郷 広瀬北	江南 宮崎港	住吉南		広瀬西	穐北 小松台 加納		生目台東				学園木花台	生目台西		▲鹿村野	▲去川	▲浦之名
中学校	18	19	→	20	21	→	→	22	23	24	23	24	→	→	25	→	→	25
		本郷		大塚	東大宮			久峰	生目南	赤江東	▲鏡洲	生目台			加納			
合計	56	59	61	63	64	65	68	69	71	72	71	72	73	74	75	74	73	72

（２）本市の人口の将来推計と学校規模への影響

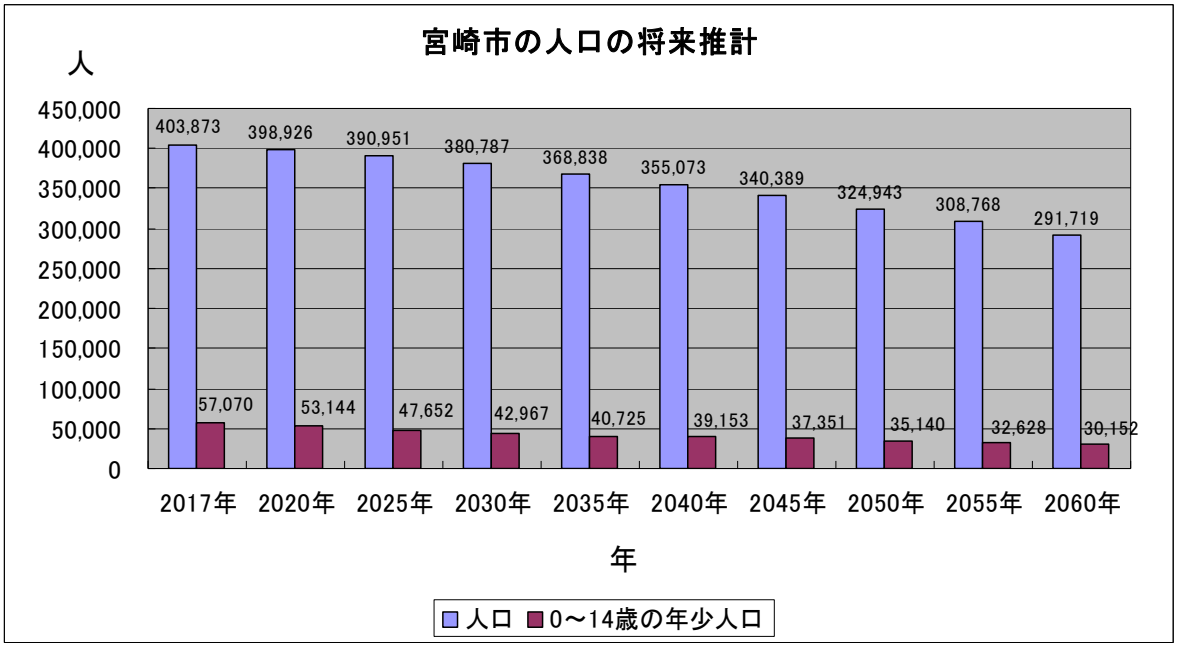
本市の人口は、平成２２年（２０１０年）には、４０万人を超え、平成２５年（２０１３年）をピークに減少に転じ、平成２８年（２０１６年）には４０万人を下回りました。

本市のまちづくりの最上位計画となる「第五次宮崎市総合計画」では、いくつかの推計方法により本市の将来人口の推計値を示しています。このうち、地域自治区別に推計した合計値によると、１０年後の令和１２年（２０３０年）には、約３８万人まで減少し、その後も減少を続け、令和４２年（２０６０年）には、３０万人を下回ると推計しています。

また、同様に年少人口（０～１４歳）について見てみると、平成２９年（２０１７年）には約５万７千人でしたが、令和１２年（２０３０年）には、約４万３千人と、１万４千人の減少が見込まれ、さらに令和４２年（２０６０年）には、約３万人にまで減少すると推計しています。（表４）

表４で示すように、本市の年少人口が、この先の１０年間（２０３０年まで）でも１万人以上減少し、さらにその先も減少が続くとの推計を踏まえると、本市の児童生徒数は、前述の「（１）本市の児童生徒数と学校数の推移」では、令和６年度までの推計として「減少」を見込んでいましたが、令和７年度以降についても引き続き「減少」をたどり、学校の規模も、全体として小さくなっていくものと予測できます。

【表４】



（人口推計の条件設定）

・平成２９年（２０１７年）１０月１日現在の住民基本台帳人口を基に推計

・国立社会保障・人口問題研究所の推計に基づき、令和４２年（２０６０年）の将来人口を推計。（宮崎市の将来推計人口モデルとは異なる）

（３）本市の学校の規模

学校規模の標準は、学校教育法施行規則第４１条において、小中学校とも学級数は１２学級以上１８学級が標準と定められています。

【学校教育法施行規則（抜粋）】
第４１条　小学校の学級数は、１２学級以上１８学級以下を標準とする。ただし、地域の実態その他により特別の事情のあるときは、この限りではない。
第７９条　第４１条から・・（略）・・までの規定は、中学校に準用する。（以下略）

①本市の小学校の規模の状況

小学校については、４７校のうち、１１学級以下の学校が１５校となっています。

２０年前である平成１１年度と比較すると、学校数は２校減っていますが、１１学級以下の小学校が４校増加しています。（表５）

【表５】小学校の学級数の比較

学級数	平成１１年度（A）	令和元年度（B）	B－A
１～５	2	3	1
６	6	5	▲１
７～８	0	2	2
９～１１	3	5	2
１２～１８	19	10	▲９
１９～	19	22	3
合計	49	47	▲２

※特別支援学級を除く。
※平成２１年４月に去川小学校、平成３１年４月に浦之名小学校が閉校。
※鹿村野小学校は平成２０年４月に閉校したが、平成７年４月から休校していたため、学校数に含めていない。

②本市の中学校の規模の状況

中学校については、２５校のうち、１１学級以下の学校が１２校となっています。

２０年前である平成１１年度と比較すると、学校数は２５校で変わりませんが、１１学級以下の学校が８校増加しています。（表６）

【表６】中学校の学級数の比較

学級数	平成１１年度（A）	令和元年度（B）	B－A
１～２	0	0	0
３	0	1	1
４～５	1	0	▲１
６～８	1	7	6
９～１１	2	4	2
１２～１８	15	13	▲２
１９～	6	0	▲６
合計	25	25	0

※特別支援学級を除く。

３　学校の小規模化による影響

（１）学校の小規模化に関する調査

本市の現状にもあるように、本市でも児童生徒数の減少に伴う学校の小規模化が進んできていることが分かります。

そこで、本市では、小規模化が進んでいる学校の実態を把握するため、令和元年７月に「クラス替えができない学年がある学校」を対象として、「学校の小規模化に関する調査」を実施しました。調査の概要や結果は、以下のとおりです。

<「学校の小規模化に関する調査」の概要>

１　調査期間　令和元年７月２２日（月）　～　８月７日（水）

２　調査対象　令和元年５月時点で、「クラス替えができない学年がある」、以下の１６校を調査対象とした。（小学校１５校、中学校１校）

小学校・・・古城小、瓜生野小、倉岡小、木花小、鏡洲小、青島小、内海小、池内小、宮崎西小、生目台東小、生目台西小、七野小、広瀬西小、穆佐小、大久保小

中学校・・・青島中

３　調査項目

①児童生徒数が少ないことによる学校の魅力について

②児童生徒数が少ないことによる学校の課題について

③魅力を生かす取組や、課題を解消する取組として、学校が取り組んでいること

<調査結果　主なもの>　　**※全ての結果は、資料編に掲載。**

①　児童生徒が少ないことによる学校の魅力

- 運動場や体育館、特別教室などが余裕をもって使える。（１４校）
- 意見や感想を発表できる機会が多くなる。（１３校）
- 一人一人の学習状況や学習内容の定着状況を的確に把握でき、補充指導や個別指導を含めたきめ細やかな指導が行いやすい。（１２校）
- 異年齢の学習活動を組みやすい、体験的な学習や校外学習を機動的に行うことができる。（１０校）
- 教材・教具などを一人一人に行き渡らせやすい。例えば、ICT 機器や高価な機材でも比較的少ない支出で全員分の整備が可能である（９校）
- 児童生徒の家庭の状況、地域の教育環境などが把握しやすいため、保護者や地域と連携した効果的な生徒指導ができる。（９校）
- 様々な活動において、一人一人がリーダーを務める機会が多くなる。（８校）

・地域の協力が得られやすいため、郷土の教育資源を最大限に生かした教育活動が展開しやすい。（８校）

② 児童生徒が少ないことによる学校の課題

学級数が少ないことによる学校運営上の課題

・クラス同士が切磋琢磨する教育活動ができない。（１３校）
・クラブ活動や部活動の種類が限定される。（１０校）
・生徒指導上課題がある子供の問題行動にクラス全体が大きく影響を受ける。（９校）
・班活動やグループ分けに制約が生じる。（８校）
・習熟度別指導などクラスの枠を超えた多様な指導形態がとりにくい。（７校）
・男女比の偏りが生じやすい。（７校）
・体育科の球技や音楽科の合唱・合奏のような集団学習の実施に制約が生じる。（７校）

教職員が少なくなることによる学校運営上の課題

・平日の校外研修や他校で行われる研究協議会等に参加することが困難となる。（１４校）
・経験年数、専門性、男女比等バランスのとれた教職員配置やそれらを生かした指導の充実が困難となる。（１２校）
・教員個人の力量への依存度が高まり、教育活動が人事異動に過度に左右されたり、教員数が毎年変動することにより、学校経営が不安定になったりする。（１２校）
・教職員一人当たりの校務負担や行事に関わる負担が重く、校内研修の時間が十分確保できない。（１２校）
・学年によって学級数や学級当たりの人数が大きく異なる場合、教員間に負担の大きな不均衡が生じる。（１１校）
・ティーム・ティーチング、グループ別指導、習熟度別指導、専科指導等の多様な指導方法をとることが困難となる。（９校）

学校運営上の課題が児童生徒に与える影響

・児童生徒の人間関係や相互の評価が固定化しやすい。（１３校）
・切磋琢磨する環境の中で育まれる意欲や成長が引き出されにくい。（７校）
・進学等の際に大きな集団への適応に困難を来す可能性がある。（７校）

（２）本市の学校の小規模化の特徴

前述の「学校の小規模化に関する調査」の結果を踏まえ、児童生徒数が少ないことによる学校の魅力や課題として、以下のとおりまとめました。

		魅力（メリット）		課題（デメリット）
児童生徒に関すること	1	施設面、教材・教具面 ○活動スペースが広く、活動がしやすい ○教材・教具が一人一人に行き渡りやすい ○ＩＣＴ機器を整備しやすい	1	切磋琢磨する機会が少ない ●児童生徒同士による学び合いが少ない ●多様な見方や考え方に触れる場が少ない ●新たな人間関係の構築が困難となる
	2	きめ細かな指導・支援 ○学習面・生活面における個人の状況を把握しやすい ○個別指導や補充学習の回数・頻度が増える ○効果的な指導・支援により、学習内容の定着が図られる	2	クラブ活動や部活動の減少 ●クラブ活動や部活動が限定され、多様な選択ができない ●仲間同士の励まし合い、競い合いの場が少ない
	3	意見や感想、発表の機会が多い ○説明力や表現力が向上する ○主体的・対話的な話し合いが活性化する	3	人間関係の固定化 ●特定の児童生徒の言動の影響が大きい ●学級内の男女比に偏りが生じやすい ●学校生活上の役割分担が不均衡になりやすい ●トラブル発生時の解決が長期化しやすい
学校・教職員に関すること	1	児童生徒の生活や家庭状況が把握しやすい ○個人の状況を詳細に把握でき、対応しやすい ○家庭の相談に応じたり、連携したりしやすい ○いじめ・不登校を早期に発見し、対応できる	1	教職員の負担増や指導方法の制約 ●校務分掌や行事計画の負担が大きい ●出張の回数が多く自習が増える ●研修や研究の機会が少ない
	2	地域の資源や人材を生かした活動の充実 ○地域と学校の連携による体験学習が充実する ○一人一人が体験できるカリキュラムを編成できる ○キャリア教育などへの協力が得やすい	2	班活動やグループ分け、集団学習の制約 ●体育や音楽等に関する集団学習に制約が生じる ●習熟別指導等の多様な指導形態がとれない ●修学旅行等に係る経済的負担が大きく、活動に制約が生じる
	3	異年齢の学習活動の組みやすさ ○全般的な教育活動において異学年交流が図られる ○リーダーを育てる場となりやすい ○全員が役割を担当することで、主体的な活動を実施できる	3	バランスのとれた教職員の配置が困難 ●専科指導等、教科専門性の対応に制約が生じる ●学級担任等の業務において、教職員に偏りが生じる ●ＯＪＴによる資質向上の機会が少ない

4　小規模化に対応した「魅力ある学校づくり」の方策

前項で整理した「本市の学校の小規模化の特徴」について、今後、より学校の魅力を高めながら、学校の小規模化に伴う課題に対応していくために、「魅力（メリット）を生かす方策」及び「課題（デメリット）を解消・緩和する方策」を考える必要があります。

そこで、次の２つの方策と学校の取組事例をまとめました。また、現在本市で取り組んでいる小規模特認校制度の概要についても紹介します。

（1）魅力（メリット）を生かす方策

- 個別指導や補充学習の継続的な実施、学習内容定着のための十分な時間の確保など、年間を通して行う。
- 家庭や地域と連携しながら、学習面以外においても一人一人のサポートを行う。
- 児童・生徒会活動や各種の班活動等を通じて、全ての児童生徒に役職を経験させる。
- 各教科や総合的な学習の時間等において、主体的で対話的な話し合いができるようにする。
- 隣接学年のみならず、学校全体での異年齢活動や協働学習を年間を通じて計画的に実施する。
- 地域の資源や人材を生かした校外活動や部活動など、地域の特色を生かした体験の機会を積極的に取り入れる。
- 「ＧＩＧＡスクール構想」を見据え、ＩＣＴ機器を活用しながら、一人一人の教育的ニーズや学習状況に応じた個別最適化を進める教育活動を展開する。また、近隣校や県外の学校とのオンライン授業（遠隔授業）などに活用することで、他校と積極的に交流を深める。
- 空き教室を「コミュニティ・スペース」として活用することで、地域の方が児童生徒と交流を図ったり、教職員と学習の打合せを行ったりしながら地域と学校の連携を推進する。

（2）課題（デメリット）を解消・緩和する方策

- 上級生がリーダー役となった異学年集団での協働学習や体験学習を年間を通じて計画的に実施する。
- 複数の教員が教科指導に関わるなど、より多くの教職員に児童生徒一人一人に関わりをもたせ、多様な観点での評価や校務の適切な分担を行う。
- 全職員で全児童生徒を見守ったり、学年を指導・支援したりするなど、組織的に対応する。
- 中学校区で学校間ネットワークを構築するなどし、定期的に互いの学校を訪問して合同授業や合同行事を行う。
- ICT を活用し、他校との合同授業を継続的かつ計画的に実施する。

・コミュニティ・スクールを活用し、地域と学校の連携を深め、その地域の魅力を生かした学校づくりを行う。
・他校との合同部活動の実施や地域人材を活用した部活動指導員の配置、地域の特色を生かした活動の創出など、工夫改善を進める。

（３）各学校の取組

前述の「学校の小規模化に関する調査」では、「魅力を生かす取組や、課題を解消する取組として、学校が取り組んでいること」についても調査しました。その中では、主に以下のような取組事例が報告されました。

・教職員への依存が強くならないよう、児童自らが考え、行動するよう、児童の指導にあたるようにしている。
・中学校区内の小学校の連携を増やし、宿泊学習を合同で行っている。
・地域人材や大学生など、多様な人との触れ合いを積極的に取り入れている。
・過去に担任であったり、委員会活動や専科指導等で関わっていたりすることから、児童生徒に関する情報共有を積極的に行っている。
・学力向上への対応のため、管理職等が算数科などの取り出し指導をしている。
・小学校高学年に地域の伝統芸能の継承を行う中で、卒業生を含めた教え合いや対外的な発表の機会を通して、児童の自信や故郷を誇りに思う心、社会性、コミュニケーション能力などを養っている。

（４）小規模特認校制度について

本市では、市内全域から通学が可能な「小規模特認校」制度を七野小学校で実施しています。

七野小学校の「小規模特認校」制度では、緑豊かな自然環境に恵まれる小規模校で、心身のすこやかな成長を図り、自然にふれる中で豊かな人間性を培い、明るく伸び伸びとした教育を受けさせたいという保護者の希望に応えるとともに、あわせて小規模校の教育活動の一層の活性化と複式学級の解消を図ることを目的としています。

（令和元年５月時点で、児童５９名のうち２０名が小規模特認校制度により就学。）

「宮崎市ならでは」のコミュニティ・スクールの導入に向けて

本市では、令和元年度に「宮崎市コミュニティ・スクール推進委員会」を設置し、導入に向けた検討をはじめ、令和２年度からは、「モデル校」として、市内の４校区で取り組むこととしています。

コミュニティ・スクールを導入することで、以下のような効果が期待されますが、小規模化が進む学校にとっても、魅力を高めるための教育活動について、議論の場となることが期待されます。

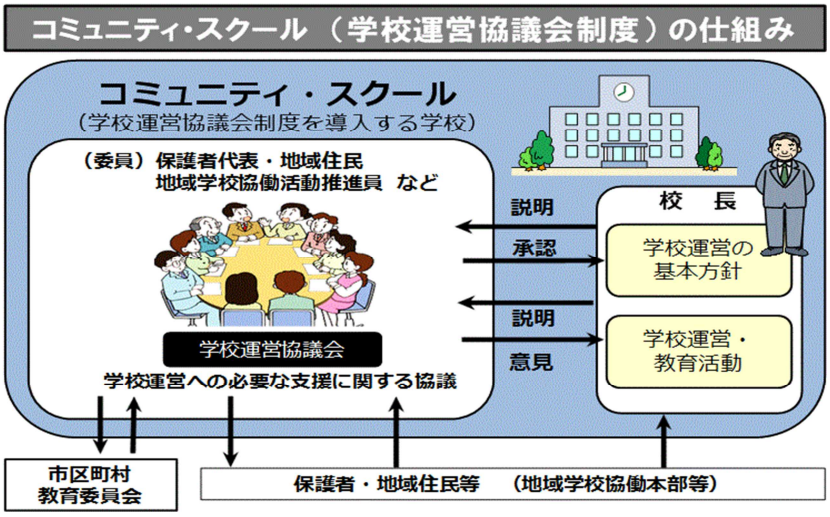
地　域	学校がより身近な存在になる　将来のまちづくりの担い手が育つ
子ども	学びの幅が広がる　地域への誇りと愛着が深まる
学　校	学校運営への支援がより充実する　学校の課題を地域とともに解決できる

本市では、「宮崎市ならでは」のコミュニティ・スクール推進体制の構築に向け、以下に示す３つの視点にたって、導入を進めています。

① 学校関係者評価委員会制度から学校運営協議会制度への発展的な移行

② 地域自治区地域協議会や地域まちづくり推進委員会などの既存組織との連携

③ 地域貢献を視点とした双方向性のある体制づくり



「学校運営協議会設置の手引き（令和元年度改訂版）」（文部科学省）より

なお、コミュニティ・スクールを設置した他の自治体では、次のような地域と学校の連携が図られています。

●地域人材を活かした学習活動　●地域の「お宝」について学ぶ「ふるさと学習」の充実

●地域行事への児童生徒の参画　●地域の伝統芸能の継承、地域と協力した防災活動

●登下校の見守り、学校の花壇や通学路等の整備の協力

●子どもたちへの本の読み聞かせ、部活動支援

5　本考え方の活用

（1）各学校へ期待すること

「1　策定の背景と目的」でも述べたように、本考え方は、本市の学校が小規模化しても、「魅力ある学校」として存続させていくことを目的としています。

学校においては、それぞれの学校の実情を踏まえ、本考え方を活用し、「魅力ある学校づくり」のために、学校が「できること」、「やるべきこと」について、議論し、できることから取組を進めていただきたいと考えています。

（2）家庭・地域との連携

「魅力ある学校づくり」を学校で議論する中では、保護者や地域住民との連携・協働が必要になってきます。

そのため、保護者や地域住民とも情報を共有しながら、地域とともに議論を深める必要があります。

実際に、学校の魅力を高めるために、児童生徒や保護者へのアンケートを実施し、地域住民と意見交換をしながら、地域の特色を生かした取組を実現させた学校の事例もありました。

このように、地域の方々とともに「魅力ある学校づくり」に取り組む場合には、地域の資源や人材など、その地域の特色を生かしたものにすると、より効果的です。

また、本市では、『「宮崎市ならでは」のコミュニティ・スクール』の導入を進めていますが、コミュニティ・スクールが地域の魅力を生かした学校づくりについて議論する場として活用されることを期待しています。

各学校においても、既に様々な取組を実践されていますが、今後も本考え方を活用しながら、ぜひ、地域の方々と一緒に「魅力ある学校づくり」に取り組んでいただきたいと考えています。

（3）教育委員会の情報提供

第二次宮崎市教育ビジョンでは、基本理念として『宮崎で育ち、学ぶことを通して、郷土に誇りと愛着をもつ感性豊かな「みやざきっ子」の育成』を掲げており、地域・家庭・学校・行政が一体となって「みやざきっ子」を育成することとしています。

今後、人口減少が進んでいくことで、学校の小規模化が進むと考えられますが、学校が今後も地域の中の「魅力ある学校」であるためには、教育委員会と学校が情報を共有し、連携していくことが重要です。

このため、教育委員会では、本考え方に基づき学校への助言や支援を行うとともに、学校の小規模化についての他自治体の取組など、学校へ情報提供を行い、「魅力ある学校づくり」を支援してまいります。

（参考資料）

1　児童生徒数の今後の推移

教育委員会では、宮崎県教育委員会からの調査（令和元年５月３０日付け「令和２年度以降の児童・生徒数及び学級数調等の提出について」）に基づき、令和６年度までの児童生徒数を以下のとおり推計しました。

（１）小学校

No.	学校名	平成				令和					
		H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
1	宮崎小	430	442	416	410	393	369	363	345	337	326
2	小戸小	357	363	335	343	348	338	342	315	318	314
3	大淀小	750	737	738	752	761	789	796	799	802	780
4	大宮小	874	913	903	938	941	919	920	900	890	856
5	宮崎東小	304	306	292	316	306	300	302	306	309	293
6	古城小	126	122	113	109	102	95	99	97	88	90
7	江平小	781	788	782	828	808	802	806	794	810	787
8	西池小	894	911	925	974	967	964	968	957	955	912
9	檍小	632	648	620	623	603	573	569	546	542	532
10	潮見小	613	621	575	553	536	530	525	515	503	504
11	恒久小	510	499	514	510	517	534	545	543	547	530
12	赤江小	748	756	763	765	769	765	753	734	709	697
13	国富小	842	820	787	758	749	712	686	673	663	661
14	瓜生野小	194	192	199	201	206	195	194	191	184	179
15	倉岡小	179	170	181	193	175	170	167	170	160	158
16	木花小	220	215	211	213	228	221	227	224	231	227
17	鏡洲小	16	19	21	27	29	29	31	29	30	23
18	青島小	140	132	135	138	138	134	123	116	113	110
19	内海小	19	20	18	16	15	17	19	21	23	25
20	住吉小	873	876	916	929	943	946	952	951	932	913
21	生目小	506	534	579	618	628	636	637	629	609	604
22	大塚小	752	726	747	739	746	737	736	753	731	737
23	池内小	273	273	276	261	278	269	271	266	257	262
24	宮崎西小	316	296	291	267	263	259	248	242	232	246
25	東大宮小	887	859	855	823	791	765	721	726	692	687
26	宮崎南小	747	715	772	779	801	796	800	815	786	780
27	本郷小	763	731	729	721	731	730	740	764	772	744
28	宮崎港小	419	423	443	441	442	432	441	439	442	434
29	江南小	677	687	710	703	715	696	684	669	657	664
30	住吉南小	555	599	590	601	604	598	570	553	557	535
31	檍北小	665	636	640	643	652	634	642	641	636	631
32	小松台小	567	580	588	610	609	597	593	593	594	574
33	生目台東小	283	274	264	278	262	249	233	217	212	201
34	学園木花台小	375	380	367	348	352	336	336	330	334	331
35	生目台西小	227	223	216	207	205	199	199	190	183	184
36	田野小	545	574	601	629	644	641	630	616	613	599
37	七野小	66	68	64	60	59	53	48	40	40	44
38	佐土原小	321	305	304	307	280	269	261	254	249	244
39	那珂小	238	249	266	276	282	282	273	270	254	258
40	広瀬小	630	654	646	654	684	682	694	676	681	679
41	広瀬北小	644	628	621	618	606	625	629	628	611	598
42	広瀬西小	249	258	270	273	287	292	299	309	308	301
43	高岡小	364	373	365	402	419	443	458	453	451	436
44	穆佐小	138	136	130	135	139	135	130	128	123	116
45	清武小	638	664	666	700	692	700	691	653	658	637
46	大久保小	150	160	165	160	168	168	164	160	162	166
47	加納小	945	931	910	921	930	923	892	882	886	860
48	旧浦之名小	14	16	12	7	-	-	-	-	-	-
小学校合計		22,456	22,502	22,531	22,777	22,803	22,548	22,407	22,122	21,876	21,469

（２）中学校

	学校名	平成				令和					
		H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
1	宮崎東中	329	327	309	289	308	318	332	325	319	318
2	宮崎中	544	515	511	448	469	462	485	497	493	489
3	宮崎西中	545	544	520	496	492	503	515	522	510	510
4	大淀中	586	568	556	560	531	535	542	557	552	549
5	大宮中	506	506	511	509	475	483	475	508	500	499
6	檍中	635	637	610	602	591	596	598	614	613	612
7	赤江中	476	462	459	440	454	468	472	481	469	477
8	木花中	318	312	312	301	294	302	297	305	299	301
9	青島中	43	44	50	46	41	37	38	45	43	41
10	宮崎北中	166	173	163	158	139	138	141	149	147	145
11	住吉中	560	557	566	576	570	587	586	605	598	601
12	生目中	381	396	400	432	468	497	504	493	488	492
13	本郷中	710	715	700	686	651	662	661	680	669	673
14	大塚中	704	664	630	627	601	597	600	619	613	611
15	東大宮中	594	583	564	551	569	573	585	586	584	584
16	生目南中	210	181	165	160	148	145	147	152	151	148
17	赤江東中	297	292	276	279	256	264	256	260	260	258
18	生目台中	260	269	241	213	186	189	198	204	198	200
19	田野中	270	270	255	253	254	267	281	284	276	276
20	佐土原中	278	290	275	254	246	237	256	254	249	247
21	広瀬中	338	309	294	288	300	295	299	304	298	296
22	久峰中	410	399	389	407	425	446	438	446	438	440
23	高岡中	256	239	229	232	236	228	238	239	229	232
24	清武中	381	368	347	330	341	349	362	359	357	350
25	加納中	367	382	399	437	432	441	434	449	442	442
中学校合計		10,164	10,002	9,731	9,574	9,477	9,619	9,740	9,937	9,795	9,791
合計		32,620	32,504	32,262	32,351	32,280	32,167	32,147	32,059	31,671	31,260

（児童生徒数の推計方法）

- 平成２５年４月２日から平成３０年４月１日までの宮崎市の出生児数に対し、平成２９年度から平成３１年度までの各学校への入学割合を基に令和６年度までの入学者数を推計。
- 第２学年から第６学年は、平成３０年度から３１年度の進級率を基に推計。
- 特別支援学級の第１学年は、県の数値を参考に推計。

（３）児童生徒数の１０年間の推移

	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
小学校	22,456	22,502	22,531	22,777	22,803	22,548	22,407	22,122	21,876	21,469
中学校	10,164	10,002	9,731	9,574	9,477	9,619	9,740	9,937	9,795	9,791
児童生徒数	32,620	32,504	32,262	32,351	32,280	32,167	32,147	32,059	31,671	31,260

2　学校の小規模化に関する調査

１　調査期間　令和元年７月２２日（月）　～　８月７日（水）

２　調査対象　令和元年５月時点で、「クラス替えができない学年がある」、以下の１６校を調査対象とした。（小学校１５校、中学校１校）

小学校・・・古城小、瓜生野小、倉岡小、木花小、鏡洲小、青島小、内海小、池内小、宮崎西小、生目台東小、生目台西小、七野小、広瀬西小、穆佐小、大久保小

中学校・・・青島中

３　調査項目

①児童生徒数が少ないことによる学校の魅力について

②児童生徒数が少ないことによる学校の課題について

③魅力を生かす取組や、課題を解消する取組として、学校が取り組んでいること

調査結果

問１　児童生徒数が少ないことによる学校の魅力について、該当するものに「レ」を入れてください。（複数回答可）

- 一人一人の学習状況や学習内容の定着状況を的確に把握でき、補充指導や個別指導を含めたきめ細やかな指導が行いやすい。（１２校）
- 意見や感想を発表できる機会が多くなる。（１３校）
- 様々な活動において、一人一人がリーダーを務める機会が多くなる。（８校）
- 複式学級においては、教師が複数の学年間を行き来する間、児童生徒が相互に学び合う活動を充実させることができる。（１校）
- 運動場や体育館、特別教室などが余裕をもって使える。（１４校）
- 教材・教具などを一人一人に行き渡らせやすい。例えば、ICT 機器や高価な機材でも比較的少ない支出で全員分の整備が可能である（９校）
- 異年齢の学習活動を組みやすい、体験的な学習や校外学習を機動的に行うことができる。（１０校）
- 地域の協力が得られやすいため、郷土の教育資源を最大限に生かした教育活動が展開しやすい。（８校）
- 児童生徒の家庭の状況、地域の教育環境などが把握しやすいため、保護者や地域と連携した効果的な生徒指導ができる。（９校）

問２　「１」以外に学校の魅力がありましたら、記入してください。

- 全職員が全児童のことを知っている。
- 全職員が一人一人を大事に教育している。全職員が担任の気持ちで、全児童に接している。一人に関わる時間が長い。保護者とも、十分に連携が取れる。放課後子ども教室があるので、宿題が終わった後、異学年と思う存分５時まで遊んでいる。今は、不審者の心配があり、なかなか、放課後、友だちとの外遊びは少なくなった。家だと、ゲーム中心の遊びになるが、学校なので、外遊びをしている姿をよく目にする。
- 単年度ではなく、継続した児童間の集団づくりができる。
- 上級生、下級生の縦のつながりが強くなる。
- 少人数のため、様々な活動の中で、一人一人の児童に自己存在感をもたせるなど、人として大切に育てることができる。
- 児童生徒数が少ないことにより職員数も少なくなることでの学校運営上の課題や、児童生徒間での人間関係が固定化（学校によっては６～９年間をほぼ同じ集団で過ごすことになる）されやすいなどの問題もあるが、「職員と児童生徒・児童生徒相互・職員と保護者等とのかかわりは密になり、相互理解の深まりやそのことによる支え励まし合うなどの環境も生まれやすい。」という魅力もある。
- 概ね全校児童のことを把握する事が可能なので、中、長期的な指導への見通しが立てやすい。新年度への引継にも生かすことができる。
- 全職員で配慮の必要な児童の共通理解を図りやすく、適切な対応をすることができる。
- 生徒一人一人とのコミュニケーションがとりやすく、アットホームな雰囲気が作れる。

問３　児童生徒数が少ないことによる学校の課題について、該当するものに「レ」を入れてください。（複数回答可）

（１）学級数が少ないことによる学校運営上の課題

- クラス同士が切磋琢磨する教育活動ができない。（１３校）
- 習熟度別指導などクラスの枠を超えた多様な指導形態がとりにくい。（７校）
- クラブ活動や部活動の種類が限定される。（１０校）
- 運動会・文化祭・遠足・修学旅行等の集団活動・行事の教育効果が下がる。（２校）
- 男女比の偏りが生じやすい。（７校）
- 上級生・下級生間のコミュニケーションが少なくなる、学習や進路選択の模範となる先輩の数が少なくなる。（１校）
- 体育科の球技や音楽科の合唱・合奏のような集団学習の実施に制約が生じる。（７校）
- 班活動やグループ分けに制約が生じる。（８校）
- 協働的な学習で取り上げる課題に制約が生じる。（４校）
- 教科等が得意な子供の考えにクラス全体が引っ張られがちとなる。（４校）
- 生徒指導上課題がある子供の問題行動にクラス全体が大きく影響を受ける。（９校）
- 児童生徒から多様な発言が引き出しにくく、授業展開に制約が生じる。（４校）
- 教員と児童生徒との心理的な距離が近くなりすぎる。（２校）

（２）教職員が少なくなることによる学校運営上の課題

- 経験年数、専門性、男女比等バランスのとれた教職員配置やそれらを生かした指導の充実が困難となる。（１２校）
- 教員個人の力量への依存度が高まり、教育活動が人事異動に過度に左右されたり、教員数が毎年変動することにより、学校経営が不安定になったりする。（１２校）
- 児童生徒の良さが多面的に評価されにくくなる、多様な価値観に触れさせることが困難となる。（３校）
- ティーム・ティーチング、グループ別指導、習熟度別指導、専科指導等の多様な指導方法をとることが困難となる。（９校）
- 教職員一人当たりの校務負担や行事に関わる負担が重く、校内研修の時間が十分確保できない。（１２校）
- 学年によって学級数や学級当たりの人数が大きく異なる場合、教員間に負担の大きな不均衡が生じる。（１１校）
- 平日の校外研修や他校で行われる研究協議会等に参加することが困難となる。（１４校）
- 教員同士が切磋琢磨する環境を作りにくく、指導技術の相互伝達がなされにくい（学年会や教科会等が成立しない）。（７校）
- 学校が直面する様々な課題に組織的に対応することが困難な場合がある。（５校）
- 免許外指導の教科が生まれる可能性がある。（３校）
- クラブ活動や部活動の指導者確保が困難となる。（１校）

（３）学校運営上の課題が児童生徒に与える影響

- 集団の中で自己主張したり、他者を尊重する経験を積みにくく、社会性やコミュニケーション能力が身につきにくい。（３校）
- **児童生徒の人間関係や相互の評価が固定化しやすい。（１３校）**
- 協働的な学びの実現が困難となる。（３校）
- 教員それぞれの専門性を生かした教育を受けられない可能性がある。（３校）
- **切磋琢磨する環境の中で育まれる意欲や成長が引き出されにくい。（７校）**
- 教員への依存心が強まる可能性がある。（４校）
- **進学等の際に大きな集団への適応に困難を来す可能性がある。（７校）**
- 多様な物の見方や考え方、表現の仕方に触れることが難しい。（６校）
- 多様な活躍の機会がなく、多面的な評価の中で個性を伸ばすことが難しい。（２校）

問４　「３」以外に学校の課題がありましたら、記入してください。

・各学年１学級（１年のみ２学級）という小規模校であると言っても、１学級３５名前後の児童数であり、問１に対応できる魅力とは程遠いのが事情である。

・小規模校は、受益者の数がどうしても少なくなるため、公的な施設設備の面、予算の面で規模が小さくなる。

・児童養護施設をかかえるため、心の悩みや特性を抱える児童が多く、個人の影響が大きくなることがある。

・全職員による相互授業参観・協議を研修の中に取り入れ、全職員が一体となった授業づくりを行っている。

・小集団のよさを生かした共同的な学びの推進を図っている。

・特別支援教育の合理的配慮を必要とする児童や家庭的な問題を抱える児童が多く在籍し、授業時間以外の担任の業務が過重な負担となっている。児童一人一人をきめ細かく指導したくても「定数」の壁でできない。また、職員研修や児童の参加要請について、大規模校と同じ扱いであることも課題である。

・教職員の定期異動によっては、指導者（指導できる人材）がいなくなるなど特色ある教育活動の伝承が難しくなったり、組織としての協働体制作りに支障が出ることもある。少ない職員数の中では一人一人の役割は多くなり、そのことが多忙感につながる場合や、職員個々の考え方などが組織全体に与える影響も大きくなり、そのことでの協働意識の低下が懸念されることもある。
　教職員配置においては、小規模校ほど、職員の人柄（協調性や人間性など）や指導力等への配慮が必要である。

・市全体の各部会等へ、校時程や時間割の工夫によりできる限り参加し、協力をするようにしているが困難な状況がある。学校や児童への還元を考えた場合、会へ参加することがベストではあるが、何か良い方法はないかと考える。特に、部会の理事や役員の依頼もあり負担が大きくなっている。児童への影響を最小限にするための対応（自習課題やその後の見届け、補充指導等）による負担も大きい。ＰＴＡ活動においては、Ｐ戸数が少なく、協力的であるがゆえに負担は大きいものがある。

・評価の視点や教員同士の切磋琢磨など他力本願な職員には言えることであろう。そういう意味では、自己研鑽ができる教員、多面的に子どもを評価することの意味合いを理解している教員、指導力以前に学生時代までにいろいろな活動を経験してきた人物の採用など、職業的に経験豊富な人材を採用することが大切である。その意味でも学校は小学校時代から多くの体験的な教育活動を計画的に行い、色々な活動ができる大人を育てる意識を持たなければいけないと考えている

・学級担任の持ち上がりを避けようとすると職員の配当が固定化されがちである。同一日に出張が重なると職員が少ないため対応が厳しい。

・部活動数に制約があるため、その事を理由に他校へ入学する生徒が増えてきており、ますます小規模化が加速してきている。

問５　上記で挙げた魅力を生かす取組や、課題を解消する取組として、学校が取り組んでいることがありましたら、記入してください。（これから取り組みたいことでも構いません）

・教職員への依頼心が強くなってしまう傾向にあるため、児童自らが考え、行動するよう、意識して児童の指導にあたるようにしている。

・教職員には、助けたくても、じっとがまんして、児童が考えそれから行動する様子を見守る、試行錯誤させることを意識して指導するよう、機会あるごとに話している。

・同一中学校区内の小学校の連携の機会を増やす。５学年で合同宿泊学習を行う。

・学校の先生(職員)と児童のみの世界とならないよう、多様な人との出会いの場を積極的に取り入れるようにしている。(校外からの専門的な職員による講座、地域人材活用、大学生との連携等）

・これから、地区との合同運動会、合同学習発表会と大舞台があるので、集大成として、この１年の成長を見出していきたい。昨年から、何か自信につながることはないかと考え、新聞社への作文投稿を始めた、昨年は、１年間で２５文掲載された。今年は、７月２２日までで、すでに１７文掲載された。小さいことだが、子どもたちが書くことに自信を持ちつつある。

・近隣の学校との合同学習を実施したり、宿泊学習（５年）や修学旅行（６年）は事前学習を含め合同での実施を行っている。

・本校は単学級の学年構成であるが各学級（学年）の児童数は３０～４０名ほどであり、現段階では児童の学び合い等（学習意欲を含め）が低調ということはなく、むしろ、児童一人一人が活躍するなどの機会も多い。そのために、少人数の職員であるということを利点（強み）として捉えてた職員の意識づくりを進めている。
　具体的には、所属職員は過去にその学年児童の担任であったり、委員会活動や専科指導等で担当していたりなど様々な立場から一人一人の児童にかかわっていることをもとに日常的な情報共有を積極的に行ったりしている。組織的な対応が必要なときには、臨機応変・スピーディーに職員連絡会（ケース会議含む）等を行うことができることも組織的な強みである。
　また、低・中・高の学年部として各種教育活動を行ったりすることで、複数の職員による指導の充実と指導技術等の学び合いの強化を図っている。（例：水泳指導を２学年（２学級）で行い専科等の職員も指導にあたることで２学級を３～４人の職員で指導する。校外活動や交流活動等の複数学年での実施。等）給食指導においては、専科・少人数指導職員や養護教諭、教頭等が学級に入り、１学級を複数の職員で対応・指導している。

・児童、教員、保護者、地域の方々が連携した活動が実施しやすい。例えば、夏季休業中の登校日に、全校児童で、ゲームに取り組んだり昼食を共にするデイキャンプを実施している。また、高学年では、地域の伝統芸能を継承している。卒業生を含めた教え合いの伝統や、対外的な発表による自信や故郷や母校への誇りの育成ができている。これらの取り組みが、社会性やコミュニ

ケーション能力を身に付ける場や協働的な学びの場となっている。
　教頭を活用することで、国語、算数の複式での授業解消ができている。

・学校の伝統を受け継ぐことについて、学年ごとに目標設定を行い、教師と児童が共に作り上げている。

・小学校だが、学校に教科担任制を導入したいと考えている。

・少人数指導においては学級単位のグループ分けから学年単位でのグループ分けにして、学年全体での理解度の向上を目指して、児童の実態に応じたよりきめ細やかな指導を考えている。その他、職員の意識改革を図りながら今後取り組んでいきたいと考えている。

・全職員で全校の児童の様子を観察し見守ることができるので、このことを生徒指導上の強みとして学校運営にあたりたい。

・学力の２極化対応のため、適宜管理職が算数科の取り出し指導をしている。

・地区大会を経ずに直接県大会に出場できる種目への参加募集をかけ、臨時で部活動を作って相撲大会に出場し入賞した。現存部と競合しないよう、臨時部を作ることで生徒の活躍の場を広げることができた。

問６　その他、ご意見がありましたら、自由にお書きください。

・どの学年にも困り感をもっている児童が増えてきており、３５名前後の学級を学級担任経営していくことが困難になってきているのが現実である。教師の数を増やす、もしくは、学級を増やす等の対応が急務である。

・一般的な各学校全体が抱える業務量は同じであり、大規模校では職員数により適切に分担が出来るが、小規模校では、職員一人当たりの分担量が必然的に多くなるのは否めない。そんな中、悉皆研修でも、職員数は違うのに同様に出会を求められるのは大変である。原則的に学級担任しかいないのが小規模校であるので、学級担任の校外への出張が複数回となって増えてくると、担任と児童の関係が薄くなったり、自習等により学級の状況も不安定になることもある。管理職が代わりに出会して支援していく場合もある。

・校舎もすばらしく、環境もよく、教育は少人数で受けられる宮崎市内の隠れ家のような学校である。宮崎市内の方で知らない人が多いと思うので、昨年から、何かにつけて、学校をＰＲしてきた。これが管理職の勤めだと思う。昨年、浦之名小の閉校式典に出席し、これが学校がなくなることかと寂しさを実感した。その時に、絶対に閉校にならないように頑張りたいと思った。退職まで残りの日々、精一杯小学校の親善大使として、色々な場で小学校のよさをアピールしていきたいし、次の校長にもその使命をつないでいきたいと切望している。

・学校現場では、人数の多い少ないにとらわれることなく、特性を強みに変える経営や職場づくり、授業づくり、子どもの集団づくりを目指すことが大切であると考える。

・小規模ならではの魅力もあるが、様々な課題も多く、職員会で解決策を考えながら実施に至っている。一人一人の児童に学習することの楽しさを味わわせる中で、将来に渡って生きる力を身に付けさせられるよう、今後も様々な工夫を図っていきたい。

・今後、学年１学級の 200 人～300 人規模の学校が増えるであろう。児童数が「少ない」ことだけで学校の課題をみるのではなく、校長ミーティング、学校マネージメントヒアリング等の結果と照合し総合的に実情を把握してほしい。今般の児童生徒を取り巻く家庭環境や社会風潮がもたらしている負の影響や家庭の教育力の実態を分析した上で、学校が果たすべき役割など方向性を示していただけると良い。他市町村では、独自に職員加配をする工夫も見られる。宮崎市教育ビジョンを具現化するために、「魅力ある学校づくり」の定義付けや、独自の「適正」基準創出など、現場の課題を解決する工夫を期待する。

・児童生徒数の減少は職員数の減少（学校の小規模化）に直結しているために、教育活動全体の活性化や効果的な運用等に課題はあるが、少人数・小規模学校ならではのよさ「児童間、教師と児童間、教師間等のかかわり・交流の深まりなど」や、「日常的な情報共有や素早い対応・支援などが進めやすいこと」等も大切にしたい。その中では、特に職員の人間力が重要になり、小規模学校の課題やよさを十分に理解しつつ同僚職員と協調して職務にあたり子どもに向き合える人の

配置が望まれる。

・教員の、基礎的・基本的業務の在り方について話し合い、指導していることの見える化日常化を図ることによって、教員と児童の意識の高揚や活動意欲の活性化を図ることで少人数学校ならではのきめ細やかな指導が充実すると考えている。本校でも十分多様な考えを引き出すことは可能である。保護者や地域の協力も得られるので、職員がいかに発想を豊かに、計画を綿密に、準備を用意周到にするかでその効果は決まると思うので、職員指導をしつつ効果が得られる活動や内容の充実・成果の発信などを掲げていきたい。